

## 高齢者とのつきあいスキル

### —3つの関わり方にみる高齢者へのソーシャルスキルに関する探索的検討—

横山奈緒枝\* 田中共子\*\* 吉田 薫\*\* 細川つや子\* 下村文子\*\*

#### Social Skills for Enhancing Interpersonal Relationships with the Elderly : Through Three Characteristic Relationships

\*Naoe Yokoyama, \*\*Tomoko Tanaka, \*\*Kaoru Yoshida,  
\*Tsuyako Hosokawa, \*\*Tomoko Shimomura

\*Faculty of Social Welfare, Kibi International University  
\*\*Okayama University

This study investigates the social skills for forming interpersonal relationships with elderly individuals as community neighbors. We carried out semi-structured interviews with nineteen adults who often communicate with elderly people and are goods communicators : one male, eighteen females, 28-65 years old ( $M=51.8$ ,  $SD=8.91$ ), seven care workers, five individuals who have mutual interests with the elderly, and seven community officers.

The results are as follows :

1) We analyzed the skills through a KJ method, and identified nine major categories: environment, sending messages, receiving messages, nonverbal, cognition, respect, help, relationship regulations, and coping with problems ; 2) There are three types of interpersonal relationships with the elderly : spontaneous ; helping-related ; those formed through community roles ; 3) Social skills depend on the relationship with the elderly. It is important to select skills that reflect the contact purpose and degree of competence of the senior citizen.

The above findings suggest that active communication with healthy elderly individuals as community neighbors is required for symbiosis in a "graying" society.

---

\* 吉備国際大学  
\*\* 岡山大学

## キーワード

高齢者 the elderly

ソーシャルスキル social skills

世代間交流 cross general communication

共生 symbiosis

## I. 研究の目的

少子高齢化の進展のなかで生じている様々な社会変動のなかでも，“地域社会での人々の関わりの希薄化（厚生労働省，2005）”は、人々の暮らしをめぐる各種制度や地域生活の充実のために、問題として注目すべきことである。この希薄化を示す具体的データは多く、一般的な近所づきあいの程度の変遷にみてみると（内閣府「社会意識に関する世論調査」），50.0%を超えていた「親しくつきあっている」という回答は、この30年間で22.0%程度へと大幅に低まり、「つきあってはいるが、あまり親しくはない」、「あまりつきあっていない」は45%弱から71.0%へと増加をみせた。60歳以上の高齢者の近所づきあいについても（内閣府「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」2003年），「挨拶程度」や「つきあいはほとんどしていない」を合わせると48.0%と半数近く、親しい友人は「同性・異性のいずれもない」と約1/4は答えている。

高齢期は、その前期から地域における対人関係は乏しくなる傾向があり、後期にいたってはその対人関係は家族内に限定されやすい（下仲，1997）といわれる。また、60歳以後は、高音域の著しい聴力低下だけでなく、低音域の聴力低下がみられるようになる。土田（2001）は、このような老人性難聴は、生理的側面からだけでなく、心理的側面からも高齢者のコミュニケーションに影響を及ぼし、言語コミュニケーションに対する意欲だけでなく社会参加への意欲も低下させてしまうという。コミュニケーションの困難さから、頑固や非協力的という誤解を招く可能性があることも指摘されており（矢部、七田、巻田、旗野，1991），コミュニケーションにおける課題が“関わり”に与える影響も小さくはない。周囲との関わりを維持することは、高齢者自身の健康状態を維持するだけでなく、社会における豊かな高齢期の構築において重要な要素であろう。どのような配慮や対応が大切であるのかの具体的要素を示すこと

は意味があると考えられる。

とくに、近年，“アクティブエイジング”<sup>注1)</sup>が提唱され、活力ある豊かな高齢期の実現を掲げるなど、高齢者自身の社会参加や、高齢者の生活を支える地域支援が重視されるようになった。地縁的な活動や地域社会を豊かにしていく人々のつながりも、近年「ソーシャル・キャピタル」といわれ、社会の効率性を示す要素として“見えざる資本”とみなすようになっている<sup>注2)</sup>。このような傾向は、希薄化した関わりの改善に向けた手だてともいえるだろう。なぜなら、関わりの乏しさが、断絶や敵対につながる恐れもあり、豊かな高齢期の実現の障壁になるといつても過言ではないからである。共生に向けた世代間の関わりの活性化が求められる。

本研究は、前述したような“高齢者との関わり”に焦点を当て、人々が高齢者との関わりのなかで用いる「ソーシャルスキル」内容を、関わり方の特徴から整理し直し、関わり方の技能や手がかりを探っていくものである。ソーシャルスキルは心理学の用語で、「対人関係を円滑にするための技能」、「相手から肯定的な反応をもらうことができ、相手の否定的な反応は避けることができるような技能」を意味するものとして注目されてきた。実践例としては、学習障害児を対象に不適切な行動の改善を試みたもの（佐藤、2003）や、非行少年を対象に親和動機との関連から更生のための指導方法を検討したもの（磯野、堀江、前田、2004）、自閉症の子どもを対象に移動スキルの習得を試みたもの（渡部、2002）などがある。この手法は、対人場面における適切な行動の練習（ソーシャルスキル・トレーニング）により、行動レパートリーの獲得が可能になるということから、現実的な効果を期待するものである。たくさんの技能を選択肢としてもっていること、そして特定の状況に合う、適切な社会生活技能を選択できること、さらに適切なタイミングでそれを行えることが、一連の行動を成功させていくためには重要といわれる（福島、2004）。今後、地域における多様な高齢者との関わりを充実させていく上でも、関わり方の幅広い選択肢やタイミングを図ることなどは大切であり、ソーシャルスキル概念を用いることで効果的な工夫ができると考えている。

注1) このアクティブエイジングとは単に身体的な活動をいうのではなく、社会的、経済的、精神的、文化的な事柄に継続的に参加し、関与することを通じて、家族、友人、地域、社会に貢献することといわれる。

注2) アメリカの政治学者ロバート・バットナムは、「人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることができる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴」と定義している（内閣府国民生活局「ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」）。

「高齢者と対人関係を築いていく時に必要なソーシャルスキル」については、下村、吉田、横山、細川、田中ら（2005）が文献を集め、整理を行っている。そのなかで、高齢者福祉の領域では「ソーシャルスキル」の用語を用いたものは乏しく、コミュニケーションの技術や対人関係上のコツのような“概念”でまとめられたものが多かつたことが報告されており、この領域のソーシャルスキル研究が不足していることが示された。

そこで、本研究では高齢者との交流を円滑に進めていく際に使われるソーシャルスキル内容を、その関わりの特徴から3領域に分類し、地域における高齢者とのコミュニケーションや関わりを良好に築いていくための特徴的な要素を検討する。そして、様々な関わりに応じたスキルの様相を具体的に把握し、柔軟な関わりを可能にする手がかりとなり得る基礎的技能を整理することを目的とする。高齢者との関わりを築き、円滑なものにしていく技能は、保健・医療・福祉等のあらゆる専門領域においても有効なものとなろう。また、高齢者へのソーシャルスキルの理解は、自ずと、世代の異なりがもたらすことばの表現や、物の考え方などの異質さを浮き彫りにすることにもつながり、高齢者との関わりのあり方を再考することにもなる。本研究は、高齢者との関わりにおけるソーシャルスキル学習プログラムの編成や、現場への適用をも視野に入れた研究であり、世代を超えた地域での共生を実現していくための方法を考察しようとするものである。

## II. 研究の方法

調査対象者は、知人や知人の紹介などにより、日頃、地域の高齢者と上手に関わっている19人（表1）で、平均年齢は51.8歳（SD=8.91）を選定した。“上手な関わりを持っている”という要素に重点を置いた結果、女性18名、男性1名と、偏りのある構成となつたため、性別によるスキルの差が含まれている可能性は否めない。

これらの調査対象者の高齢者への関わり方は、I「介護・援助を中心としたおつきあい（以下、「介護中心」、「介護群」と示す）（7人）、II「趣味・社会活動・地域生活を中心としたおつきあい（以下、「趣味中心」、「趣味群」と示す）（5人）、III「地域の委員・役割を中心としたおつきあい（以下、「役割中心」、「役割群」と示す）（7人）に分類された。本稿では高齢者との対応の仕方といつても実際は一様ではなく、コミュニティでは日々様々な関わり方が行われているものと思われるため、これらの

表1 調査対象者の概要

対象	年齢	性別	役割等	関わりの分類
A	38	女性	ホームヘルパー（福祉施設勤務の経験あり）	I
B	57	女性	相談業務、介護福祉士	I
C	63	女性	ホームヘルパー	I
D	58	女性	ホームヘルパー	I
E	48	女性	介護支援専門員	I
F	48	女性	保母	II
G	45	女性	ホームヘルパー（看護師経験あり）	I
H	63	女性	愛育委員、精神障害者支援員	III
I	65	女性	愛育委員	III
J	53	女性	専業主婦	II
K	55	男性	公務員（公民館勤務）	II
L	28	女性	専業主婦（公務員経験あり）	II
M	41	女性	ホームヘルパー	I
N	59	女性	専業主婦	II
O	53	女性	民生委員	III
P	53	女性	民生委員	III
Q	52	女性	民生委員	III
R	53	女性	民生委員	III
S	52	女性	民生委員	III

\* I. 介護中心（介護群）、II. 趣味中心（趣味群）、III. 役割中心（役割群）

関わりの仕方に注目し、これらの3分類を分析軸として、それぞれの関わりのなかでスキルがどのように用いられているのかを詳しく検討してみたい。各群の特徴としては、I「介護群」は今日的なニーズが高い保護的、支援的な関わりである。II「趣味群」は自然発生的なもので、従来から地域にみられた本人の意の向く活動を中心とした関わり、III「役割群」は、地域支援のために、各種の制度を適用して人工的に強めている関わりで、意図的に高齢者との出会いを設定するという今日的なおつきあいの形とみなすことができる。

調査方法としては、4人の調査者が半構造化面接法を用いて行った。調査に際しては事前に、下村ら（2005）を参考に想定し得るスキル内容をカバーするようなガイドラインを作成し、調査者間の認識の統一を行った上で調査を実施した。聞き取りは「高齢者の対応に合わせた方法や特性を把握する方法」、「高齢者の希望に沿う対応や

良さを引き出すつきあい方」、「きっかけの作り方」、「これだけはしないように特に気をついていること」を中心に行った。面接時間は60～150分、平均94.7分であった。調査期間は2004年5～7月であり、個別およびグループ面接による。調査場所はインフォーマントの自宅、勤務先、公共の集会所などであった。倫理的配慮として、あらかじめ、研究目的、録音することやプライバシーの保護などの説明を行い、許可を得た上で調査を実施した。

分析手続きは、調査結果をすべて逐語録として書き起こし、スキルと思われる箇所に下線を引き、スキルの抜き出しを行い、KJ法によって分類した。これら文章全体と抜き出したスキルは、各調査者が担当した調査結果を発表し、全員でスキルの特徴を検討しながら読み進めた。分類は、社会心理学研究者のスーパーヴィジョンを受けながら進めた。類似しているものをまとめて、小グループを作っていく、さらに大きなグループとしてまとめた。これらの分類を、類似性に関して討論しながら繰り返し行い、カテゴリー名をつけるという方法をとった。これらのカテゴリーを文脈から読み解きながら、役割や立場による異なりを整理した。

### III. 結果と考察

抽出されたスキル数は、637個（平均33.5個、SD=12.15）であった。最終的に9の大カテゴリ、34の小カテゴリ、116の下位項目にまとめられた。スキルの全体像は、表2の通りである。みいだされた大カテゴリは、スキル交流の場を整える環境調整スキル、メッセージの発信スキル、受信スキル、非言語的なコミュニケーションスキル、認知や解釈のスキル、相手の尊重を形にするスキル、援助や保護のスキル、立場に合わせた関係性の調整スキル、問題がある時の対処法略のスキルであった<sup>注3)</sup>。それぞれの具体例には、振る舞い方を指南する行動的スキルと、ものの見方や考え方を整える認知的スキルが含まれていた。

本稿では先に報告したスキルの枠組み自体ではなく、その詳細に焦点を当てる。それは、スキルが、高齢者との関わり方や役割、立場によって異なる様相を示してお

注 3) T. Tanaka, K. Yoshida, N. Yokoyama, T. Hosokawa and T. Shimomura (2006) : Social skills for enhancing interpersonal relationships with the elderly. Asian Journal of Social Psychology (Published by The City University of Hong Kong) へ投稿中のものである。

表2 抽出されたスキー一覧

大カテゴリ	小カテゴリ (下位項目の数)	大カテゴリ	小カテゴリ (下位項目の数)
①環境調整 スキル	場の共有	⑥尊重スキル	敬い (2)
	接する機会を持つ (2)		礼儀
	会話の機会を持つ		頼る (1)
②発信・送信 スキル	声かけ (3)		ほめる (1)
	挨拶 (2)	⑦援助・保護 スキル	手助け (2)
	話題 (2)		心配り (4)
	話し方 (10)		確認 (3)
	修正・訂正 (2)	⑧関係性スキル	距離をとる (10)
③受信スキル	自己開示 (2)		自然な親密化 (7)
	傾聴 (7)		相互性 (2)
④ノンバーバル スキル	察する理解 (2)		ゆとり
	相づち (2)	⑨対処方略 スキル	楽しむ (5)
	非言語 (4)		ストレス対処 (3)
⑤認知・解釈 スキル	笑顔 (2)		トラブル対処 (4)
	高齢者意識の希薄化 (3)		忍耐
	個別性		
	高齢者の特性 (10)		

り、各々の文脈のなかで示されるスキルも異なっていることに意味があると理解したからである。これらの関わり方の異なりの理解が、関わりの選択肢を拡大し、柔軟な関わりの形成に結びつくと考えている。以下、I 介護群 (7人)、II 趣味群 (5人)、III 役割群 (7人) のなかから、各1例の詳細を示した上で、表現方法や、強調点など、スキルの異なりに焦点を当てて述べていくこととする（表3、表4）<sup>注4)</sup>。

注4) ここでは、聞き取り調査で得られた内容について、その表現のまま示している。

表3 典型的な事例の詳細

Aさんのスキルは「こちらが上に立たないこと」、「目上の人として尊敬の対象と思って話す」、「長く頑張っておられるという気持ちで接する」など敬いの精神を感じさせる。その現れなのか「目上の人だから敬語になるし、方言になる」という。「〇〇は～でいいですね」とか「こうして止めていいですか」「この順番でいいですか」というように小さなことを確認する方法を具体的にあげている。

高齢者への理解のために「昔を知ること」を重視し、その人生観、たとえば『「〇〇はもったいない」とか、「〇〇はいけないことだ」ということを知ること。接しているなかで「察する」ということ。「たぶん、この人ならこういう答え方をするだろうな」というふうに考える。』など、相手を立てる態度、察するという相手の考え方への歩み寄りが理解できる。

非言語的なスキルとして肩をもむ、他には足浴、マッサージ、さする、髭剃り、握手するなどのスキンシップを用いる。「相手が座っていたらこっちも座って、視線を下げる」他、とくに障害を持っている方々へは身振り手振りを用いたり高齢者をとらえる上でも「いつもと違うしさ。姿勢もいつもと違うとか。いつもこんなふうに座っているのに、今日は違うと思うこと。今日はよく手が動く」などを把握し、相手の会話への積極性を図っている。話題は相手が乗ってきた話、季節とか、農作業、野菜のことなど相手に合った話題を選んでいる。話し方は相手のいったことを繰り返すようにしており、「初対面で打ち解けたい場合は笑顔、落ち着き、明るさの感じをどう表現するかが大事」と述べている。ホームヘルパーという仕事を介する関わりのなかで、高齢者が遠慮して希望などをいわない事があるため、『はっきりいってくれることの方がよいから、「遠慮しないでください。いってくださいね」と働きかけている』という。相手の変化に対して「すばらしいですね」、「すごいですね」、「前と違ってこんなに変わりましたね」、「勉強させてもらっています」、「いい先生になっていただいています」など励ましの言葉も豊富である。

また「良いほうに考えようとする」ことが大事であるという。「あきらめないで沿っていく」「〇〇でダメならまた別の方法で」とか「今日ダメなら別の時に」と理解することによる、ゆとりのある態度、あせらない姿勢が示されている。

伝統芸能の指導については『最初の頃とは違って、「指導」から「一緒にやる」とか「一緒に楽しむ」「一緒にいいものを作りたい』っていう感じになってきて「仲間」みたいな感じになってくるね。』と述べている。このような1つの目的を持った仲間同士の関係では、「仲間として対等っていうかな」と表現しているように、仲間としてのつきあいが「対高齢者」ということより優先していることが理解できる。それは「お年寄りだから気遣うという意識は全然ない」という言葉からも理解できる。また、高齢者も「お年寄り扱いしようものなら怒られるよ」という。

話し方は、できるだけ聞き取りやすいように「大きめのはっきりした声で話す」、「きちんと伝わっているか確認する」などの配慮を行っている。とくに「お年寄りが相手だと時間の聞き間違いや勘違いが多いがそれらはこちらがしっかり確認すれば済むことである」と述べている。高齢者ということではやはり身体のことが心配であり、「ちょっと様子を見てみたり、無理せんようににしたり」と細かな声かけ、気遣いが行われている。

表3の続き

また、担っている仕事を通してのつきあいの側面もあり、たまにはいろいろすることとか、腹がたつこともあるという。この場合は「これが仕事と割り切る」「どんな仕事でも多かれ少なかれいらいらすることや腹のたつことはある」という認識であり、「自分の場合、たまたまその相手がお年寄りのほうが普通の人より多いだけだと考える」とのことである。役割から、個別ではなく、集団的な配慮も必要となることがあり、「トラブルがあったら、どちらの話もよく聞いてひたすら調整役に徹する」、「愚痴を聞いてあげる」などの集団の調整を担っている。このような仕事や活動を通してのKさんの知恵として「お互いが聞いてあげること」「お互いが賑り合うこと」「歩み寄ること」などがおつきあいにおいて大切と述べている。高齢者への要望としては、「要望をいってくれると、こちらとしても動きやすくなる」という。このように、高齢者とのおつきあいというより人と人とのおつきあいが強調され、「いいたいことはきちんという」、「相手への心配り、心遣いは誰とでもつきあう上でも必要である」ことなど広い意味での人間関係のスキルが求められていることを指摘している。

高齢者とのつきあいではその関係づくりが一番大事であると考えている。「無理があるのはゆがんできますよ」と話しており、関係づくりでも自然な関わりを大切にしていることが理解できる。その会話の開始は「自然ですね。こちらが話をするというのではなく、向こうが話をしてくださいのを聞くので十分でしょ。」と述べている。高齢者のなかには「誰も聞いてくれん話を聞いてくれる人が来た。さあ一話をするぞって、話をします。」といった様子がみられ、対象者を待っている姿が語られた。このような高齢者には「ひたすら聞くこと」の重要性をあげている。会話の具体的な例として、健診票（健康診査票）を持参した時の次のような内容があげられた。『(健診に)「行かんといけんかな（いけないかな）」というので「そりゃ、そうじゃろう、痛とうなっても誰も見てくれへん」といいますね。(相手は)「死にもせんといかんのじゃけ」、「あんたらな若いけん思わんかもしねないけど、人間はな、病気では死にやへんのじゃけん」と教えてくださいます。』このような具体例の話の後で、Hさんは「いっぱい勉強させてもらっています」「私の中からあなたのいいものをもらいたいなさいよということなんです」と述べ、学ぶ姿勢で高齢者と関わっていることが示されている。

留意点としては「絶対におじいちゃん、おばあちゃんとはいわないね。」と、苗字で呼ぶことをあげる。自分自身については「私は普通のおばさんだから」という自己表示を全面的に現しており、おつきあいの「自然さ」が示されている。このことについては各種専門職について例示し『目標が上から下になるんですけれど、私は目標と一緒にして「何が困るん、そうかな、そりや困るなあ。一緒に困ろう。』というんです』と、共有的な関係を示している。また、会話を楽しむという姿勢も強く示されている。

話し方は、方言丸出しで話すという。「若い頃の方が口数が多く、わかってもらおうとがんばっていたような気がします。年をとったらいわなくともわかるという気がするんです。』と年齢と共に経ていくことに関係するのか、無理がない理解が進展することが述べられている。

活動を介した関わりは「私の気持ちからしたのはよいけれど、義務になるとしんどくなる。』と表現されており、役割によって動きにくさが感じられる面をHさんなりのやり方で自分に馴染ませて肩に力を入れない取り組みをしているようである。「〇〇委員になって数年目には、地域は家族、隣近所はちょっと大きな家族と思おうやと思いましたですよ」と活動を通した地域観が述べられている。

表4 スキルの具体例（各群の特徴を示すものを中心）

	スキル	I 介護群	II 趣味群	III 役割群
1環境調整スキル	(1) 場を共有する・接する機会を持つ・会話の機会を持つ	S「話ができなくとも傍らに座る」 M「単に仕事で関わるだけじゃなくて、人と関わる機会としておつきあいしたいし、単にヘルパーで、手伝ってくれる人っていうだけで終わりたくないって気持ちがある。」	L「話の内容とか中身はおいといて、その雰囲気に慣れて楽しめるようにする。」「世間話とかは、少し中身が分からなくても、全然問題ないと思う。」 N「女はやっぱりしゃべるのが好きじゃない。それを聞いて、一緒に笑ったりしてくれる人がいるっていうのは、いつまでたっても楽しいと思う。自分から話さない人でも、みんなの話をニコニコ笑って聞いてたり。話の輪に入ってるっていうので満足。」	P「何回も何回も行ってっていう。やっぱり粘り勝ちかな。そのうちに心を開いてっていう感じかな。」 O「何度も足を運ぶことが必要かもしれません。」「やっぱり再々行くことかもしれないね、打ち解け合えるようになるにはね。」 Q「行った時にどういう話をするとかっていったら取り留めのない話ですけどね。だから取り留めないんだけど、顔を見ると安心するのよ。」
2発信・送信スキル	(1) 声かけ挨拶・呼称を使う	B「最近調子はどう？」とかいう感じで。「何か用事だった？」って聞くとまたその人が気にするので。「最近どう？夜眠れる？」って軽い声かけをすると「実はね」って次が続いてくる。」 M「どこかよそよそしい感じがするから「お父さん」「お母さん」って呼ぶ。」	N「遠慮せんと何でもいいってね」といつもいっている。」 L「単に名前だけじゃ、事務的な感じ。「おじちゃん」とか「おばちゃん」って呼び方だと近所のおばちゃんみたいで、身近に感じる。」	S「歩いていたら声かけたり、とにかく顔を見たら、車乗っても「誰々さん！」って声をかけるとかね。とにかく声かけをして「元気ですかー？」「調子どうですかー？」って感じ。」 R「何か変わったことはないですとかー？」っていって向こうから話をしてもらうようになるべく仕向けて。」「きっかけはやっぱり挨拶から始めてないと挨拶から始めてまず知つてもらうことから。」
	(2) 話題・話し方	C「早く、その人の趣味とかを見つけてあげる。好きなことをわかつてあげて、それについての話題にすれば、お年寄りの方も入ってきやすい。」 B「話が逸れて主流が何か?ってなるが気にしない。元に戻さない。元に戻ってくるから。」 O「邪険に「元気です」っていうのと、「元気ですよ」っていうのとやっぱり同じ言葉でも変わるもんが違うよね。同じ「ありがとうございます」でもやっぱりね、違うよね。」	N「共通の趣味とか、話題、そういうものがあれば話がしやすい。共通のものがあれば、話題の幅も広がるし、いろんな話もしやすい。」 F「外見、見た目、共通の課題を見つめる。一回は声かけるけど、返ってきてからによって次の声のかけ方は変わってくるわね。探りを入れるじゃないけど、言葉選び、あーこの辺が引き際かなあと。」「相手の話をさえぎらない。」「教説を使うなど、きちんとした話し方をする。」「色んな意見があったら、みんなの話をとりあえず聞いておく。」	Q「『こここの近くに住んでたんですよ』って感じで。共通の、その土地とか関連があれば、共通の話題をもってきて。」「家族のことがどうとか、やっぱり聞かれたくない人もいるから。あんまりそういうことはきちんと線をもっている人もいるから。あえてこっちからも聞かないようにしていますけどね。」 S「年上の人に対するっていうのは礼儀がね。丁寧すぎても失礼になるんだけど。目上の人に対する言葉遣いを心がけるよね。」

※太字は典型的な事例として紹介、太枠箇所は各群の特徴的な箇所である。

表4の続き

	スキル	I 介護群	II 趣味群	III 役割群
2 発信・送信スキル	(3) 修正・訂正、自己開示	D【ことばで通じなかつたことは、いいようにとつてあげるのはいいけど、変な時は引く。「あなたは違つているよ」とはいわないで、さらっと流す。】 B【失敗しても「なんでしたん?」とは絶対にいわない。何事に対しても。】		Q【「違う」とかもね、いわない。】 S【向こうの話を聞くのが中心。】
3 受信スキル	(1) 傾聴	M【おばあちゃんの一人時間の介護の大変さを受け止めあげたり、お話を聞いてあげる。】 E【聞くっていうのは、相手がこっちを認めているっていうこと。話を聞いてくれているっていうことになると、話してあげたいってなる。ただうなずくだけでもね。】 F【怒っている時も聞いてあげて、さかなにしてはいけない。逆に同じ何かに同意して余計にそういう感情を持っていくのはだめ。】	L【こっちから深い話は聞かないようにする。どちらかというと聞き役に回るようする。】 F【とにかく聞いてあげることで気持ちが晴れるのではないか。】	Q【受け入れてから問い合わせ直すっていうのが。一旦受け入れることが大事。】 S【「ああ、誰々さんと話されていていいですねー」って感じで。まあ、無理強いはできないからね。失礼だし強引にすることでもないし。】 I【もうすぐお迎えが来るとか、先が短いとか、頑固であるとかはいわれても真に受けなくてあらそうって話を受け流していく。】
	(2) 察する理解	M【お年寄りは私たちに遠慮したりして、本当のことをいわなかつたり、遠まわしにしかいってくれなかつたりする場合もあるから、そういうのは気をつけている。】「家庭に入ってきたて、どんなことが好きなのか、興味があるのか、そういうのを見つけて、そこから話をすると話しやすい。】		P【その人と話しながら、部屋の雰囲気とか、その人の話し方とか。どんなことをいいたいとか。なにか困っていることがあるかとか。話しながら観察しながら考えている。】 H【若い頃のほうが口数が多く、わかってもらおうとがんばっていたような気がします。年をとったらいわけなくともわかるという気がするんです。】
4 非言語スキル	(1) 相づち・非言語・表現・笑顔	E【身振り手振り。身体に触れる。抱きしめるんじゃなくて、ちょっと手に触れて「元気かな」って、相手の生きていることを感じるってことね。】 A【目線を下げる。相手が座っていたらこっちも座って、視線を下げる。ベッドなら腰を曲げて頭を下げる感じで話す。】 M【顔の表情とか、目線とか。そういうのを見て、どんなお気持ちなのかを見るようにする。すごく難しいけど、案外そういう表情の方が本心だったりするから。】 D【正面から座る。ちょっと引いて座る。相手が乗ってくると身を乗り出してくれるで乗っているかどうかがわかる。】		R【いいたいことがあつたら全部話すように相づちを打ったりとか。】 Q【「ああ、そうでしたよね」って相づちを打てば、向こうが「あつ前もいったんだ!」って気づく場合もある。】「散歩なんか行く時は腕組んで行つたりしますからね。家に引きこもっている時とか、外に出たい時とか。もうそうなつたらヘルパー的な感覚ですよね。】

※太字は典型的な事例として紹介。太枠箇所は各群の特徴的な箇所である。

表4の続き

	スキル	I 介護群	II 趣味群	III 役割群
5 認知・解釈スキル	(1) 高齢者意識を希薄化する		<p>N「もっと若々しい人もいるくらいだし、あんまり「高齢者」とか「年寄り」とか思ったことがない。」</p> <p>F「お年寄りと区分けしてしまうといけないと思う。」</p> <p>K「お年寄りとのつきあいっていうんじゃなくて、人と人とのつきあい方」「最初の頃とは違って、「指導」から「一緒にやる」とか「一緒に楽しむ」「一緒にいいのを作りたい」という感じになってきて「仲間」みたいな感じになってくるね「もちろん大甲にしないとか、そういう意味じゃなくて、仲間として対等。」</p>	<p>R「全然お年寄りだから、若い人だからっていう感じはないですよ。」</p> <p>Q「親と同じ世代の人を回っているから、そこら辺がダブるじゃない。あんまり年寄りに対しての違和感はないかも。」</p>
	(2) 先入観を持たない・個別性・高齢者の特性を理解する		<p>N「みんな違う人生を歩んできたってことかな。色んなやり方とか、考え方があるんだ違う。自分と年が違うっていうのももちろん、同じ70代でも全然違う。同じ時代を生きてきとるけれど、共感するようなことももちろん多いけど、やっぱり個人個人積み重ねてきたものが違う。」</p> <p>K「お年寄りのなかにはもっと弱っている感じの人もたくさんいるし、そういう人に手を差し伸べたり、大甲にすることは大切で、必要なことだと思う。ただ、それをお年寄りみんなに当てはめなくても良いと思う。」</p>	<p>O「初めは近所で気難しいっていわれてたけど～話してみれば全然そんなことなくって。すぐ今は一番仲が良い。ほんと人間見かけじゃないね。」「痴呆（認知症）はほんとに大変な病気って思ってて。別世界みたいに思ってたけど。でも、そんなことはないと思うよ、そんなに構えることはないし。遠ざけることはないと思うよ。」</p>
6 尊重スキル	(1) 敬い・礼儀	<p>A「長く頑張っておられるいう気持ちで接する」</p> <p>M「今は痴呆（認知症）できちんと会話ができなくとも、「この人はこんな素晴らしい家族を作った人なんだ」と思うと尊敬できる。」</p> <p>D「ただで年は取っていない。ちょっとでもいいところを似せていく。」</p>	<p>L「一步間違えば、怒らせたりしそうなことなんじゃけど、うまく助け舟出してくれたり、笑い話してくれたり、すごいなあと思うよ。心が広いっていうか、さすが年の功っていうか。」</p>	<p>S「年上の人にに対するっていうのは礼儀がね。丁寧すぎても失礼になるんだけど、年上の人に対する言葉使いを心がけるよね。」</p> <p>O「ある程度の痴呆（認知症）のお年寄りでも、やはり年を経てているのねえ。それだけ長く生きているのね。だからその点はすごい。名譽なことしたわけじゃないけど、それだけ長く生きたってことだけで人間すごいなーって思う。」</p> <p>R「親しく話すこと必要だけど、礼儀も忘れたらダメよね。」</p>

※太字は典型的な事例として紹介、太枠箇所は各群の特徴的な箇所である。

表4の続き

	スキル	I 介護群	II 趣味群	III 役割群
6 尊重スキル	(2) 頼る・ほめる	M『素直にお願いする。「すいませんけど、～してもらいますか？～してもらえると助かるんですけど」とか。』 L『お願いする時は「すいませんが」と。「お手数ですが」「何遅もすいません」とか。』	L『お年寄りにお願いするような時は、子どもぶる。子どもみたいに「困っているんですよー。助けてくれませんか？」って頼った感じで「△さんにしか、頼める人がいないんです」とか。大抵の人はお願いしたり、頼つたりしたら「仕方ないのね」とかいながら喜んでやってくれる。』 J「得意なことをほめたり、教えてもらったりする。」	P『おばあさんだったら「きれいですね」っていうの。「肌つやつやですね」「よく似合ってますねー!』
7 援助・保護スキル	(1) 手助け・心配り・確認	C『お元気そうでも身体は弱っているから、立っていく時でも「気をつけてよ」とか「大丈夫」とかいいってあげる。』 A『普通の方には聞いてみる。洗濯物干すことでも、干してあるのを1回見たら、干し方がわかるけど、「〇はこうでいいですね」とか「こうして止めていいですか」「この順番でいいですか」というように小さなことを。』 E『きっちり説明してあげたつもりでも通じていない時はもう一回い。何回も。「こういうことなんじゃけどね」ってそういうて必ず繰り返す。そして「これでよかったんですか」っていう。』	K『相手への心配り・心遣い』は誰とつきあう上でも必要』 J『大勢が集まるだけ、一人ひとりのときより気を使うね。あちらも立ててこちらも立ててとかね。』「高齢者の方が激しい運動をしている時にはちょっと様子を見てみたり、無理せんようにいたり。』 N『話がちゃんと（正確）伝わっているかどうかを確認するのは大事。』	O『一人はちょっとと倒れそうになったから、部屋まで上がったけど。なんか具合が悪くてね、いくら読んでも出てこないし。ドア開いていたから、ちょっとと入ってね。』「あんまり物は持っていないようにしようとしてるのよ。たまには果物の1つでも持つていこうかなって思うこともあるのよ。』 Q『介護の方が必要だと思う人には手続きをするように勧めている。』 P『物をもらったらいらないと思つても、もつて帰るようにする。』「ああ、心配したー」っていったら「心配してくれて嬉しかったー」って。』
8 関係性スキル	(1) 自然な親密化・相互性	A『「良い方に考えようとする」こと。「あきらめないで沿っていく」「～でダメならまた別の方法で」とか「今日ダメなら別の時に」って。』 B『自分がいわれて、されて嫌なことは絶対人にしない。もし、自分だったらどうかなっていうのを、どうかな、問い合わせる。』	K『長く付き合って、個人的にどんどん親しくなる。』 L『雰囲気になじめるようになったら、話題にも段々ついていけるようになつていく。』 N『話を聞いているうちに、その人がどんな人で、どんなふうに考える人かっていうようなことが分かってくる。そうしたら、どういう話が良いかとか、伝え方みたいなものも、徐々に分かってくる。』 J『お互い様な関係になるようにする。』	H『注意もないんです。自然です。』「私は普通のおばさんとも述べ、また「はだかんぽで入るんです」』 O『お年寄りに求めるんじゃなくて、自分が心を開くっていうか。自分自身が変わることが大事よね。』 Q『私たちも「ありがとう」っていうのがいるし、向こうも「ありがとう」っていう言葉がいるんだよ。そこで初めて「いや、いいですよー」っていうのがいえるというか。』

※太字は典型的な事例として紹介。太枠箇所は各群の特徴的な箇所である。

表4の続き

スキル	I 介護群	II 趣味群	III 役割群
8 關係性スキル	(2) 距離をとる・ゆとり  M「家庭の事情はそこそこで違うから、そういうのに口を出さない、詮索しない。その部分には立ち入らない。」「利用者の方のお世話をすることで、代わりに親孝行しているって思っているところもあるのかもしれない。ちょうど自分の親くらいの年だし。そうすると、やっぱり自然と優しい気持ちにもなれる。」 E「相手がかっと来たら引くこと。相手がいいたいことがあるときは冷静になつて、相手に振り回されないこと。感情的にならないこと。」 B「ゆとりをもって接する。」	N「ある程度距離を置いた方が上手くいく場合がある。」 K「とにかく大事に大事にって、はれものに触るみたいな関係では、お年寄りも息苦しくなる。」 J「何か意見をする時に、自分ではなく、その人より年上の人や目上の人についてもらう。」「こちらの意見を聞いてもらわないといけない時は、個人ではなく、みんなの意見として伝える。」	O「敬わなければいけないって思っていたよね。最初から。しなきゃいけないのかなって思ってたけど、実際接してみたら、ま、気持ちの面では（尊敬の念は）あっても、もっとホントに普通いいんだなって。」 S「お年寄りと深くまで入り込む関係とは違つて。あんまりなかまで入り込んだら、向こうも「民生委員さんなんだから、台所の方までしてほしくない」というのがあるだろうから。」 H「地域は家族、隣近所はちょっと大きな家族と思おうやと思いましたですよ。」 Q「自分にゆったりした気持ちがないとね。」
	(3) 楽しみ  M「話することで少しは気が晴れたり、相談とかしてもらえると、こっちも役に立ってる感じがして嬉しい。」	F「やっぱり喜ばれたら嬉しいかなー。「ありがとう」といわれた時、別にいってほしいわけじゃないけど。何かした時に向こうも自然に出てくるんだけど。」「自分が必要とされているのが生きがい。」	I「それも（人生の）勉強ですものね。」 Q「地域がずっと親しくなった気がする。知らない時よりも、その地域が自分にとってなんかすごく親しみ深いものになった気がする。お年寄りと話すことでの。」
9 対処方略スキル	(1) ストレス対処・トラブル対処・忍耐  M「愚痴をいったり、そういうガス抜きもないし、やっぱりどっかに無理ができる。愚痴や困ったことをみんなで吐き出して、それを共有することで、意外と他の役に立つたりする。みんなで愚痴つているうちに、いつの間にか元気になつたり。1人で落ち込むよりはいいと思う。」 G「あーここはここのやり方があるんじやねーと納得する人でないとホームヘルパーは務まりません。」 M「不用意な話題で落ち込ませてしまったら、すぐに話題を変える。」	N「たまにはだんなに愚痴をいったりするけど、それだって普通。当たり前のこと。そういうことが全然ない（相手との）関係なんてあり得ない。」 J「忍耐、我慢。どちらにしてもこっちが譲らないといけない場合の方が多い。」	O「もうくじけずに行くことだね。気持ちを切り替えて。私の仕事だって思つて。」 P「異性に対する警戒として部屋にあがる場合はドアを開けておく。」

※太字は典型的な事例として紹介、太枠箇所は各群の特徴的な箇所である。

## 1. 事例紹介

介護群の例として、Aさん（30歳代後半、女性）をあげる。ホームヘルパーの仕事において、家事援助、身体介護の対象である高齢者とのおつきあいを日々行っている。趣味群の例として、Kさん（50歳代後半、男性）をあげる。公民館に勤務しているが、伝統芸能の指導も行っており、仕事や活動を通して、地域の60～80歳代と幅広い年齢層の高齢者とのおつきあいがある。役割群の例としては、Hさん（60歳代前半、女性）をあげる。地域の愛育委員活動を担っている。また、各種ボランティア活動の経験者でもある。

## 2. 各群に特徴的にみられるスキル

### 1) 全群に共通するスキル（発信・送信スキル、非言語スキル、尊重スキル）

立場や役割などに関係なく、高齢者への共通するスキルとしては以下のものがみられた。これらは、高齢者とのおつきあいのどのような場面でも有用性が高い基本的なスキルと考えられる。

相互の信頼関係の構築とコミュニケーションを進めるための、話の始め方や挨拶、相手の呼び方、自分の話の出し方など、初対面の人一般に使えそうな工夫が行われている。役割群では、地域生活のなかで、声かけを心がけているし、日頃、介護群や趣味群も、声かけがよく行われている。質問があれば遠まわしに聞いたり、話のきっかけを作ったりしながら、親和感、親密感を高めていっている。地域での話や身近な話、共通の話題、時代背景や、過去の出来事を積極的に取り入れている。これも話を弾ませる時に、一般に用いられる工夫といえよう。話し方は、相手に合わせ、丁寧に話す。硬くなりすぎないよう敬語ばかりの表現も避けている。かといって近づくばかりでもなく、時には、一歩引いた対応をして、柔軟な距離のとり方がされている。また自分のことを話す「自己開示」も相手に合わせて行われている。

ことば以外の表情や相づちなどの工夫がみられる。相づちで会話のリズムを作ったり、視線を合わせ、話への積極的な姿勢を示したりする。はじめは特に「笑顔」が重要という。年齢に関係なく人間同士の関係における約束のあり方や、マナーが互いに歩み寄る大きさが述べられている。おつきあいの楽しみとしては地域を知るや相手の喜ぶ姿があげられている。人生の先輩として、蓄積された経験を敬う気持ちがあげられている。頼み事がある時に、甘えて頼むいい方もされる。相手も頼られることで、

はりあいがもてるからである。依頼設定しているという。総じて、相手をたてるようにしており、年上で目上の人に対する礼儀や、役回りを意識した対応がみられる。

まとめると、全群で、高齢者に限らず、普通の人づきあいで用いられる基本的スキルがみられ、また、目上、年上の人に対する一般的な敬いを示すスキルが用いられている。

## 2) 介護群のスキルの特徴（受信スキル、非言語スキル、発信・送信スキル、

### 関係性スキル、援助・保護スキル、対処法略スキル）

受信スキルは、全群で「傾聴」が大切にされている。とくに介護中心のインフォーマントではこの活用が顕著にみられた。たとえば、聴くという姿勢は何よりも「相手を認めている」ことを示す行為だというとらえ方をしたり、逆に「安易な同調によって感情をそれ以上高揚させない」などと、同調を制御したりと細やかに調整が行われている。家庭に入っていくI群では、介護ニーズや気持ちを察した行動を求められるためか、傾聴を重んじ、相手に寄り添った姿勢が重んじられている。

非言語スキルは全群にみられるスキルである。しかし、身体接触を伴う「スキンシップ」はI群のみにみられる。たとえば、さする、握手する、肩をもむ、足浴などが具体的な介護につながっている。生活行為の誘導や、相手の理解にスキンシップが用いられており、これは、相手との距離を近づけたり、安心感をもってもらうために、意識して用いられている。

発信・送信スキルも全群にみられるが、「促しの言葉」はI群のみで、会話や行動を様々に促す例がみられている。このような促しの言葉は、会話や行動の行き先を誘導していく意味合いをもち、相手に沿いながら建設的に会話を方向づけ、行動をともに行うような対応といえる。

関係性スキルのなかの「ゆとり」については、I群では、「諦めない」とか、「その時に叶わないことでも別の機会に別の形でアプローチしてみよう」といった柔軟な受けとめ方がなされている。「見守る」など、相手に合わせて寄り添うなかで使われる補償的なスキルが、介護場面で盛んに発揮されている。高齢者の身体的、精神的な虚弱さの度合いが強まれば、その頻度や比重が増す。また、I群の介護を担うインフォーマントの場合には、とくに確認の仕方が細かく、何度もしかも繰り返し行われている。

対処法略スキルは、トラブル時やストレス対処に関わるものである。I群では、同じ専門職種間での情報の共有の必要性や、個人への対応として割り切ることがあげられている。高齢者の生活維持を支援する、専門職者ゆえのスキルとも考えられる。ま

たⅠ群では、トラブルが起きてからの「対処」のみならず、予防や調整、回避などが広く細やかに行われている。

### 3) 趣味群のスキルの特徴（関係性スキル）

関係において適切な距離をとることは、全群で述べられている。自己開示の調整や一步引いた姿勢、家族の話題を避けるなど、総じて、深入りし過ぎない対応として述べられている。おつきあいのなかで、直接的意見や表現を回避することもある。また、役割によって制限や限界が生じること、擬似家族的な関わりをとることなどが述べられている。

Ⅱ群は趣味などを通じた仲間としての普通のおつきあいという意味合いが強い。相互の親密さが徐々に深まっていく。Ⅱ群では、おつきあいの経過のなかで時間をかけて、相手をよく理解できるようになっていく。それには段階があり、最初から感情を全開にした深い会話がされるわけではない。お年寄りと若い世代との間で、継続的で繰り返しのあるおつきあいの場を設定していくことの重要性が示唆される。

### 4) 役割群のスキルの特徴（環境調整スキル、関係スキル、援助・保護スキル）

環境調整スキルには、場の共有や、接する機会や会話の機会を持つという小カテゴリーの抽出ができた。Ⅲ群では、根気づよさや継続的な訪問の重要性があげられており、継続的に接触しようとする努力がみてとれる。時間や体験の共有はいずれの群でも重視されているが、環境調整スキルを駆使して、高齢者とのコミュニケーション機会を持つことが重要であろう。このように、役割群では継続的訪問と関係する環境調整が強調される。

Ⅲ群では、関係性スキルのなかで、自然体で接し、「普通」を大事にするという一貫性のある態度や、対等な関係を志向しているという心がけ、対等性へのこだわりが述べられており、特徴的である。地域を大きな“家族”とみなすなど、相手との関係だけでなく、視野を地域に広げている。

身体面、情緒面についての心配りなど援助・保護スキルは全群でみいだされている。そのなかでⅢ群の特徴として、介護まで至らない身体的な援助や、情報の提供による支援、情緒面への心配りや平等な扱いへの心配り、集団や組織への配慮といった手助けがみられる。

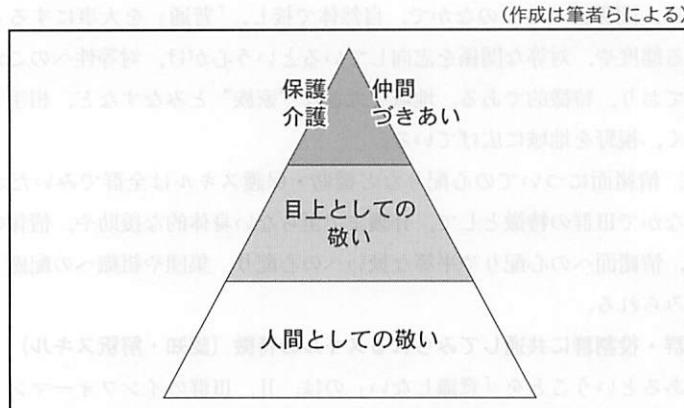
### 5) 趣味群・役割群に共通してみられるスキルの特徴（認知・解釈スキル）

高齢であるということを「意識しない」のは、Ⅱ、Ⅲ群のインフォーマントに特徴的である。高齢者ということでひとくくりにしないこと、区分けしないことが重要視

されている。高齢者意識が比較的稀薄で、「人」としてのつきあいを重視している。年齢ではなく「人数」や「個性」の影響を多く意識している。こうした人間的要素への関心は、II群における個別の関わりの重視と対応といえるだろう。IIおよびIII群では、I群に比べて、対等な関係が志向されている。II群では、対等性が繰り返し語られ、高齢者というステレオタイプ的な発想からの脱却が強調されている。これらの項目は、高齢者を社会的カテゴリーでとらえるのではなく、個人として目を向けていくという視点を示している。

小カテゴリーの「高齢者を個別に理解する」についても、II、IIIから様々な表現で述べられた。高齢者の活動性の高さや精神的な若さ、パーソナリティ、閉鎖性または開放性や、年齢に伴う変化など、全群から指摘があるなかで、とくにII群のインフォーマントは、「対等であることを求める」と述べている。こうした認識は、高齢者の活動性の高低に影響されたものと考えられる。相手の健康度、その身体的状態に合わせて配慮のレベルが異なり、それが認知・解釈スキルに結びついていると考えられる。(八木大輔編・伊藤・八木大輔著)『八木大輔選集』(八木大輔著) 森林出版社

以上のように、群ごとに主たるスキルは整理され、特徴が明らかとなった。厳密な比較については、さらにより多くのインフォーマントによる調査を必要とするが、今回の語りの範囲でみても、相手に応じた条件を重ねていく、対応の積み重ねが読み取れる。これを「対応の積み重ねモデル」と表現し、高齢者とのコミュニケーション技術の層構造を示すものと理解し、図式化してみた(図1)。



## IV. 考察

本研究では、高齢者とのコミュニケーションを円滑にするためのスキルの9つのカテゴリーの分類枠をもとに、その詳細を整理した。同じカテゴリーに属するスキルであっても、事態の内容や文脈に合わせて、関わり方の特徴が読みとれる。

I群の介護の担い手となった場合は、高齢者の高齢ゆえの特徴を意識し、その様子を理解しながら接しようとする傾向が強い。これは現在、増大する高齢者へ向けて、社会的に注目されているものである。身体面、精神面の介護を的確に行うために、行動や認知の状態を推察する必要があり、障害や欠損に対応する補償系のスキルが目立った。これらのスキルの理解は、介護ニーズが必要な高齢者への理解を深めるものとして重要である。基本的に、高齢者は尊重しながら援助する対象と捉えられているようである。ただし、そうした支援的な役回りのつきあいのなかで、自ずと繰り返されるコミュニケーションを通して、何らかの意味のあることを高齢者とのおつきあいから学び取る喜びや、高齢者の喜ぶ姿をみて、担い手も喜びを感じるなどの認知がとられ、一方通行ではなく、双方向的な関係がみられている。

IIの趣味を通じた“自然発生的”な関係の場合は、高齢者の個別性に目を向けた関係になる傾向があった。年齢より人柄を中心にみる、つまり高齢者というカテゴリーにとらわれず、その本人の個性を中心にみる「脱カテゴリー化」が起きている。そして、個人の特徴に合わせて対応していこうとする普遍的な気配りのスキルが發揮される。65歳以上の高齢者には何らかの疾患をもっていても日常生活に支障のない場合が多いといわれる<sup>注5)</sup>。要支援、要介護者という見方ではなく、従来から存在した自然な隣人としてのおつきあいを強めていくことが重要であろう。

III群の地域活動の担い手は、日頃の地域生活のなかで、役割ゆえに近づいていって関係を作ろうと意図する。この関わりは、必要性により人工的に設定されたものであるため、人工的な関わりから自然なおつきあいへと移行していく際に、不自然さを自然さへと変えていく手続きが重要になる。それは、具体的には関わりを形成し維持することを求めて、根気よさや頻繁な訪問活動によって関係を築いていくことにみられ

---

注5) 平成17年版高齢社会白書によると、65歳以上の高齢者の有訴者率（人口1,000人当たりの病気やけが等で自覚症状のある者の数）は502.7であるが、日常生活に影響のある65歳以上の高齢者（健康上の問題で、日常生活の動作・外出、仕事などに影響のある者）は235.0と開きがある（内閣府、2005）。

る。担当している「地域」はいわば人為的な関係を始動させていく責任範囲であり、ゼロから関係をつむいでいくスキルが繰り出されていく。このような自然な関係を根づかせていくスキルは、隣人感を築いていく上でも有効であろう。知り合おうとするコミュニケーションの努力があつてこそ，“人間”同士のつながりへと関係を育てることができるるのである。

以上のように、高齢者との関わりでは、「介護群」は支援を重んじて関わり、「趣味群」は本人の意を重んじている。「役割群」は、地域支援のために、意図的に関わりを設けるなど、それぞれによって使われるスキルが異なる。どのような関わりでも、与えられた機会を人間同士の結びつきに変えていくのはコミュニケーションの努力である。これらの幅のあるスキルを身につけておくことで、いずれかの関係の必要が生じた時にも困らずに対応できよう。地域生活における高齢者との関わりには、援助や様子を見守るなどの役目をもちろん、認知レベルでは、高齢者を“弱者”としてのみとらえず、また“古い”カテゴリーだけを過度に注目せずに、対等性を心がけることもできよう。人工的つきあいから始まった接触でも、それを人間的交流に育て、共生的な関わりを築いていくことを目指したい。スキルの柔軟な発揮は、地域での自然な共生を進める一助となるであろう。

本研究では、3つの関わりに絞ったが、家族間のつきあいや、地域の交流イベントにおけるつきあいなど、高齢者との関わりにはさらに様々なものがある。いろいろな関わりが同時進行で進められていくことが重要であり、これらの広範なおつきあいの特徴やソーシャルスキルについての研究も今後、期待されるものである。

文献

- 1) 磯野美良, 堀江健太郎, 前田健一: 非行少年と一般少年における社会的スキルと親和動機の関係, カウンセリング研究, 37 (1), 15-22, 2004
- 2) 厚生労働省: 平成17年版厚生労働白書, 30, 東京, 2005
- 3) 佐藤容子: 仲間から拒否される学習障害児への社会的スキル訓練, 行動療法研究, 28 (2), 111-121, 2003
- 4) 下仲順子: 現代心理学シリーズ14, 老年心理学, 培風館, 東京, 1997
- 5) 下村文子, 吉田薰, 横山奈緒枝, 細川つや子, 田中共子: 高齢者との交流に必要なソーシャルスキル—研究課題の展望—, 岡山大学大学院文化科学系研究科紀要, 19: 191-206, 2005
- 6) 土田昭二: 対人行動の社会心理学, 土田昭司監修 シリーズ21世紀の社会心理学 I, 北大路書房, 東京, 2001
- 7) 内閣府: 平成17年版高齢社会白書, 31, 東京, 2005
- 8) 福島喜代子: ソーシャルワークにおけるSSTの方法, 相川書房, 東京, 2004
- 9) 矢部弘子, 七田恵子, 卷田ふき, 旗野脩一: 地域在住虚弱老人の聴力難聴が日常生活と介護に及ぼす影響, 老年社会学, 33, 81-87, 1991
- 10) 鶴田清一: だれのための仕事, 岩波書店, 東京, 1996
- 11) 渡部匡隆: 自閉症児への移動スキルの形成と地域の人々のかかわり, 行動療法研究, 28 (2), 83-95, 2002